

船宿

カヲ引立ルニハ、笑謔ニ非レバ精神伸ルコトナシ、既ニ昔年法印公○松浦鎮信朝鮮御渡海ノトキモ、如斯キ體タルコト、船手ノ傳ル所ナリト、某聞テ愕然且敬伏セリト、コレ利口ナル答ナレド、計ルニ當時ノ事實ナラン、

〔江戸砂子〕船宿 見付と柳橋との間、同朋町の河岸に多し、

三谷船の宿諸所にあり、なかなづく見附、箱崎、今戸堀此三ヶ所別して多し、

〔洞房語園異本考異〕上古へは揚屋の挑燈の棒は、十手の様にて、鐵也、茶屋は木の棒、舟宿は繩を用ひたりとかや、其頃舟宿といふ者は百姓にて、雨天の折から、客を送り來るには、多く蓑笠を著たり、舟宿は大門を限りにて、門内へ入らざる古實なれば、揚屋遊女屋までも、來ることは無理也、遊女屋、揚屋、茶屋は同坐せず、揚屋、茶屋は、舟宿と同席せざりしが、今は此事なし、

〔皇都午睡〕三編上江戸町うら川岸端に、船宿とて、大坂の茶船やの如きいと多く、濱側より半町計りも内町にも有り、前にいふ茶屋とおなじく、床几腰かけ出し、家號の行燈、墨黒に書き、棚に煙草盆、火繩箱をならべ、客きてどこ迄といへば、言下にサアお出成されと、船宿女房、或は娘など、煙草盆に火を入れ、船迄案内する、船頭直に船を出す、さやうなら御機嫌よくと見送る、其手都合よきこと感心なるものなり、

〔江戸鹿子〕今戸橋○中略 彼二丁立のはや船も、此堀に乗入て堤に登る、茲にも吉田屋、坂本屋、鶴屋、和泉屋、麓やなどとて、二丁立を業とする船頭の宿あり、

〔東都歳事記〕二月船遊山兩國より淺草川を第一とす○中略 船宿 日本橋東西河岸 鞘町河岸 本銀町壹町

目 江戸橋 堀江町 伊勢町 兩國橋東西 柳橋 米澤町 本所一ツ目邊 石原 淺草川

吾妻橋の東西 鐵砲洲 靈巖島 日比谷町邊 小網町 深川 筋違外より神田川通 牛込

御門外 新橋 汐留等なり、屋形、屋根、猪牙、にたり等、好に隨ふ、三丁と稱ふる舟は、所によりてあり、すくなき舟なり、